

第90回

特別支援教育実践研究センターセミナー報告

日 時 平成27年11月14日（土）14時～16時

講 師 小笠原恵先生（東京学芸大学特別支援科学講座 教授）

演 題 行動問題を示す自閉症児への支援
—応用行動分析学を用いて—

1 行動問題への不適切な対応

自閉症児が示す行動問題に対して、教員や保護者は時として不適切な対応をしてしまうことがある。とりわけ、自閉症児が適切な意思表出手段を持たない場合に、そうした状況は起こりやすい。多くの場合、自閉症児が示した行動問題の原因を、子どもの障害特性のせいにして、自分の能力の問題のせいにして、問題解決のための行動をとらない状態が続いてしまう。仕事や対人関係がうまくいかないとき、何か嫌なことがあったときなどの問題状況において、その原因を他者や自己の性格や能力、やる気などのせいにして問題解決のためのアクションをとらないことを、個人攻撃の罠に陥るといえる。誰かのせいにするので終わってしまい、問題が解決しないからである。

長年、特別支援教育に携わってきたが、しばしば個人攻撃の罠に陥るなどして、問題解決のためのアクションをとることができていない場面を目にする。そのような場面では、「自閉症でこだわりがあるからこの課題ができない」、「知的障害が重度だからできない」、「ADHDだから立ち歩いてしまう」などのように子どもの障害特性のせいにしてしまうことや、「教員の考え方が悪い」、「保護者の躰がなっていない」、「自分が不勉強で力がない」などのように支援者の資質のせいにしてしまうことがある。他にも、「今は調子が落ちていて不安定だからできない」、「週明けだからできない」、「エネルギーがなくなってしまうのでできない」などのように曖昧な思考に陥ってしまうことがある。いずれも行動問題の原因を何かに帰すことに終始し、行動問題の軽減を図るために必要な支援を行うことができていない。

2 行動問題を分析する基本的な考え方

自閉症児が示す行動問題に対して適切な支援を行うために必要なことは、その行動の理由を考えることである。人間がとる行動のほとんどは理由があり、この理由を探るために応用行動分析学的アプローチではABC分析という手法を採用する。ABC分析では、人間の「行動（Behavior：B）」は周囲の環境にある刺激を手がかり（きっかけ）として引き起こされると考え、行動を引き起こす働きを持つ刺激である「先行刺激（Antecedent stimulus：A）」と行動を起こしたことで環境から与えられる応答である「後続刺激（Consequent stimulus：C）」との関係から行動が引き起こされた過程を分析する。つまり、行動の前にどのようなことがあったか（きっかけ）、行動をとったらそのことがどのように変わったか（結果・対応）を分析することで行動問題の意味を探るのである。

ABC分析では、強化の原理と弱化的原理を理解することが重

要である。強化の原理とは、後続刺激によるフィードバックの結果として、行動の生起頻度や生起率が増加することである。行動の後にその人にとって良いことが起こると次に同じ状況で同じ行動をとるようになることを「正の強化」と呼び、行動の後にその人にとって悪いことがなくなると次に同じ状況で同じ行動をとるようになることを「負の強化」と呼ぶ。例えば、食事の前に（きっかけ）配膳の手伝いをするので（行動）家族に感謝されたので（結果・対応）、次の食事の前でも配膳の手伝いをするようになるような変化が「正の強化」であり、腹痛時に（きっかけ）薬を服用することで（行動）痛みが和らいだので（結果・対応）、それから腹痛が襲ったときは薬を飲むようになるような変化が「負の強化」である。

一方で、弱化的原理とは、後続刺激によるフィードバックの結果として、行動の生起頻度や生起率が減少することである。行動の後にその人にとって悪いことが起こると次に同じ状況で同じ行動をとらないようになることを「正の弱化」と呼び、行動の後にその人にとって良いことがなくなると次に同じ状況で同じ行動をとらないようになることを「負の弱化」と呼ぶ。例えば、仕事に行くときに（きっかけ）裏道を通ったことで（行動）大きな犬に吠えられたので（結果・対応）、次の日から裏道は通らないようになるような変化が「正の弱化」であり、夕食時に（きっかけ）下品なことを言ったことで（行動）会話をしてもらえなくなったので（結果・対応）、それからは下品なことを言わなくなるような変化が「負の弱化」である。

ABC分析するとき、後続刺激の評価は客観的に行う必要がある。行動に伴う結果が良いことなのかあるいは悪いことなのかは、本人がどのように感じているかによって異なるものであり、支援者の考えと相違がある場合や、本人ですら分かっていない場合があるからである。特に障害児は結果に対する気持ちを伝えることに困難があり、支援者は後続刺激の意味を見誤ってしまいやすい。そうなれば、本当は増やしたい行動を減らしたり、本当は減らしたい行動を増やしたりしてしまうことになる。このような事態を防ぐために、客観的な事実のみを捉えて整理することがきわめて重要である。

3 行動問題へのアプローチ

ABC分析に基づいて行動問題が起こる過程を客観的かつ多面的に明らかにする方法を機能的アセスメントという。機能的アセスメントには、教員や保護者へのインタビュー、Motivation Assessment Scale等の質問紙、行動観察、実験的な分析が含まれる。これらを通して行動問題の生起状況に関する情報を集めることが最初のステップである。

行動問題への介入を行うことが次のステップであるが、行動問題を弱化することだけが介入ではない。行動問題において本人が意図していたことを果たせるような代替行動を形成すること（例えば、興味を引きたいときに相手を叩くのではなく、名前を呼称させるようにすること）も重要である。代替行動に置き換えることで行動問題を減らすのである。同時に、行動問題を起こさなくてすむような環境調整を行うことやその場面で望ましい行動を増やすことで行動問題を減らすような予防的観点に立つことも重要である。